

地域の底力——今治市

愛媛県今治市

自立の水軍魂を 今に受継ぎ共存を支える

タオルと造船。愛媛県今治市では、長年地元を支えてきた地場産業が紆余曲折を経て、今再び、暮らした人々の心に希望の灯りをともし、次なる時代への道しるべになっている。さらには、瀬戸内海を渡る「瀬戸内しまなみ海道」から吹く風が、港町に新たななる可能性をもたらす。

取材：文山内史子 写真野瀬勝一

愛媛県今治市と広島県尾道市を結ぶ「瀬戸内しまなみ海道」の今治市側に位置する「来島海峡大橋」。全長 4105 メートル。



「今治城」は日本三大水城のひとつ。築城の名手として知られる藤堂高虎が手がけ1604年に完成。

地元を誇りをもたらし「今治タオル」のブランド

愛媛県今治市。高校野球ファンの方ならそう聞いて真っ先に胸をよぎるのはおそらく、「今治西高」こと県立今治西高等学校かもしれない。春夏合わせて二・四回、甲子園球場をわかせてきた名門校だ。

最近では二〇二二年の「ゆるキャラ®グランプリ」で、「パリーさん」が一位を取ったのも記憶に新しい。さらには戦国時代の村上水軍に焦点をあてた、和田竜氏作『村上海賊の娘』が「二〇一四年本屋大賞」に選ばれたことでも注目を浴びている。能島や来島といった物語の舞台の島々が、今治市内に位置す

るためだ。

メディア等でたびたび紹介される、「今治タオル」に思いを馳せる方もいるだろう。二二年に東京・青山にオープンしたアンテナショップの評判は高く、著名人をはじめ愛用者も多い。

実際、全国生産量の半数を占めるタオルは今治市の主要産業だが、数年前は「どん底だった」と語るのには、創業一九三四年の「コンテックス」代表取締役社長で、今治のタオル製造に関わる一七社で作る「四国タオル工業組合」の理事長の近藤聖司氏だ。

古くから繊維産業が盛んだった今治で、初めてタオルが織られたのは一八九四年のこと。昭和初期には「四国のマンチエスター」と呼ばれたほど、一大綿工業都市として発展した。その後も戦争やオイルショックを挟みながらも生産量は増大し、やがてバブル時代を迎える。

「当時タオルは、企業の贈答品として使われることが多かった。景気の上昇とともに需要は高まり、急激な勢いで売り上げが伸びました」

バブルと歩調を合わせた成長

は、その崩壊とともに逆方向へ。発注量が激減した上、価格競争の負のスパイラルのなかで、海外で製造された廉価な商品が輸入される。日本の問屋が切り拓いた打開策だったが、それによって問屋と共に歩んでいた国内のタオルメーカーは大打撃を受け、今治でも全盛期に比べて七割強のメーカーが倒産や廃業に追い込まれた。〇一年には輸入に関するセーフガードを申請したが、発動には至らず。近藤氏曰く「いつ事業の幕を引くか」という状況が続く。

転機は、〇六年に訪れた。縁がつながり、クリエイティブディレクターの佐藤可士和氏に組合のブランディングを依頼したのがきっかけだ。ユニクロなどのブランディングで名を馳せた時代の寵児だけに、無理を承知の上だったが、最終的には今治産タオルの質が佐藤氏の心を動かした。

「今までにない感触で、非常に吸水性もいっと前向きな連絡があったんです。その後、今治に来ていただいたのですが、技術力もあるし、まだ百何社残っている。行け

焼き鳥のまち、今治のPRキャラクター「パリーさん」。冠は瀬戸内しまなみ海道にある「来島海峡大橋」をモチーフに、腹巻は「今治タオル」で出来ている。手には、造船業が盛んなため船の形のサイフを持っている。



るのではないかと」

ロゴマークの作成を含む「今治タオルプロジェクト」が立ち上がった結果、四年後の一〇年には数字が上昇に転じた。それを導いた佐藤氏の指針は、ごくシンプルだった。

「無いモノを付加するのではなく、元々あるモノを磨くのがブランドですということでした」

礎となったのは、「今治タオル」独自の品質基準。高級品か否かといったクオリティーではなく、吸水性、安全性、耐久性といった基本的な機能基準を守りながら前進だ。とはいえ、最初のうちは相当な苦労があったようだ。

「組合は合議制で、なおかつ商工会議所や行政も絡んでいますから。しかし佐藤さんは、そんな調整を



「四国タオル工業組合」理事長の近藤聖司氏。背後を彩るのは、「今治タオル」ブランドの証となる、佐藤可士和氏考案のロゴマーク。

している時間的余裕は我々にはないんだと」

佐藤氏に背中を押されつつ生産者と消費者のコミュニケーションを図るための取り組みとして、地道ながらも的確なメディアプロモーションの展開が「今治タオル」の認知度とファンを確実に広げた。当初約六〇〇枚だったタオルに縫い付けられるロゴマークの使用枚数が、現在は六〇〇〇万枚に及んでいることこそ成功を如実に物語っている。とはいえ、近藤氏には浮き足立った感はない。

「組合のメンバーはみんな、事業運営が安易な方向へと行かなくなりましたね。今の事業の身をきっちりしようとする会社もあれば、

新企画でさらに売り上げを伸ばしていこうという会社もある。いずれにしても『今治ブランド』が自分だけのものじゃないという意識が、それぞれの企業に高まっています。今後、必ず問題は出てくる。でも、その際にはみんなが解決しようという思いがすごく強いんです」

責任の度合いが増したのには、ロゴマークとともに各社の番号がタグに記されているのも大きい。そんなタオル産業の変化を、地元はどう見ているのか。そう尋ねたところ近藤氏の表情が緩んだ。

「皆さん結婚式の引き出物や贈答品として積極的に使っていたいているのが、昔と全然違いますね」かつては、欧州の有名ブランドのOEM生産がほとんどで、今治産であっても誰も認識できなかった。さらには、贈答品の増加によりタオルそのものに有り難みがなくなっていたという。それが、地元の誇りへと変わったのだ。

染色工場からタオルの加工に必要なミシンメーカーまで、業界の裾野は広く、就業人口や受け皿も確実に増えてきた。知識を問う「タ



オルソムリエ」、技術者を対象とした「タオルマイスター」制度と、人材育成のための技能検定がまた、従事者のモチベーションを培う。新卒募集に若い人が希望を抱いて応募してくるようになった。

「今治タオル」としての海外への進出にも、近藤氏は手応えを感じている。しかも、タオル業界のみならず、インスタレーション（注1）関連の展示会にも参加が認められるようになったのが興味深い。それだけ、デザイン性や機能性にすぐれた商品が多いという証しだろう。

（注1）一九七〇年以降一般化した現代芸術の手法の一つ。屋内外を問わず、展示空間と有機的な関係を持つよう作品を展示することで、その作品だけでなく、展示空間全体を作品として体験させる芸術手法。また、その空間そのものを指す。

組合各社自慢のタオルが揃う「今治タオル」のショールーム。その一角には昔ながらの織機も展示されている。



今も継がれている 勇敢な村上水軍の魂

一致団結とともに、独立独歩もあり。独自の展開で特筆すべきは、今治市郊外に建つ「タオル美術館 ICHIRO」だ。年間入館者数約三〇万人。タオルを使ったアートやムーミン等のキャラクター関連の展示、披露宴も行われるレストランに加え、工場見学案内や自分で刺繍が施せる体験コーナーもあり、タオルにちなんだすべて



気候が温暖で、自然災害の影響を受けにくいのが、今治の特徴のひとつ。「ここを離れてよそへ行く必要はない」と、「一広」代表取締役社長の越智逸宏氏は話す。

を凝縮した一大テーマパークという観がある。

「産業観光は、三〇年来のずっと夢だったんです」と話すのは、今治商工会議所の副会長でもある「一広」の代表取締役社長の越智逸宏氏だ。大日本紡績（現ユニチカ）に一〇年勤めた後、一九七一年に独立。織機や工場、美術館の設計をすべて自らが手がけ、コツコツと事業の拡張に努めてきた。

「タオル美術館の発展が、地域のために。うちだけよくなったって、地域のためにならないければ意味がないですよ」

タオル業界不遇の時代に海外に移さざるを得なかった染色工場の復活、東京にあった物流センターの地元への移転等、今治の雇用の拡大に貢献しているが、越智氏の



思いは業界のみにとどまらない。近くの休耕田を借りてレストラン利用の無農薬野菜を栽培したり、地元の特産品を美術館で販売したりと、実践したアイデアは多岐にわたる。

「どんな環境であっても、自分の力を最大限以上に発揮し、経営をしていくのが基本だと私は思う」

話を聞きながら次第に、潮の流れがきつい瀬戸内を自在に行く村上水車のイメージがふくらんだ。「私ら越智というのは村上水車の子分でしたから、そういう氣質がDNAで残っているかもしれない」

まさしく本物だったと、嬉しさがこみあげた。



直販のショップやカフェ、レストラン等を含む5階建ての「タオル美術館 ICHIRO」。4階が製造工程見学フロアになっており、高速でタオルが織られる様子を間近に見られる。



市町村合併で生まれた 日本一の海事都市今治

タオル業界だけを見れば現在の今治は課題を克服したかのようにも思えるが、約一六万人の市民を抱える菅良二市長は現状をどのように見ているだろうか。

今治市は〇五年に一二の市町村が合併するという、全国でもあまり例のない大合併を遂げたが、目下抱える大きな問題は人口の減少

だ。

「県下でも人口減少のスピードが非常に速く、先の報道にもあった日本創成会議では『消滅可能性都市』のひとつになりました。非常に危機感を持っています」

すでに子育て支援策としての放課後児童クラブの充実、妊婦への保健サービスの強化等、細かい配慮を重ねてきたが、まちの活力の源はなんとと言っても、雇用の場の確保だと菅氏はいう。

今治市の人口推計で興味深いのが、一五〜二四歳の世代では進学などの影響で減少するものの、二五〜二九歳では数字は上昇する。ところが三〇歳を過ぎると、再び減少傾向に。多くの若者は地元でいったん就職するが、途中で断念せざるを得ない状況が見える。

ということとは、三〇代が未来に希望を抱ける就職先としてタオル産業の復活は一翼を担うはずだ。さらには、合併効果が今後も期待される雇用の柱がある。それは海事産業だ。

瀬戸内海の島々では二世紀か



「今治造船」では年間90隻以上の船舶を建造。大型貨物船が「2013年シップ・オブ・ザ・イヤー」を受賞する等高い評価を得ている。

2009年に市長に就任した菅良二氏は、瀬戸内に浮かぶ大三島出身。マイバイクに乗り、「瀬戸内しまなみ海道」のイベントにも積極的に参加。



スケールもあり、感動やインパクトは大きい。タオル同様、造船業も誇るべき今治の自慢として子どもたちの目に映るに違いはない。

大規模合併は、造船会社そのものにも、結束力をもたらした。その話すのは、創業一九〇一年、国内のみならず世界でもトップクラスの建造量を誇る今治造船の執行役員の都築恵氏だ。

ら塩づくりがさかんで、その輸送のため海運、造船業が発展してきた長い歴史がある。合併前は造船所や海運会社が各自自治体に点在していたが、「今治市」としてまとまった現在、造船に携わる事業所は一四、建造隻数では国内の一七％を占める。外航、内航合わせると海運業は三〇〇社近い。

「日本一の海事都市、海事クラスターが形成された。その集積をふまえ、古くから海運等で栄えてきた伝統、歴史、文化をまちづくりを生かしていこうと思っています」と菅市長は語る。

その一環として、合併後は進水式や造船工場の見学、海事教室の開催等が積極的に行われている。

「一四の造船所はもともと近隣なので、何十年も前から仕事上や家族的なつき合いがありました。合併によりいずれも今治市の企業となったことでよりまとまって動くようになるんじゃないんです。また、行政も一体化され、地域全体でより迅速な対応ができるようになりました」

たとえば国立公園指定の瀬戸内海は、個別企業の乱開発を防止するため、さまざまな規制が課されている。しかし、合併後の今治市

が、環境にも配慮した造船振興計画を立ち上げたことで、一四の造船所にとっては、今治での事業拡大への突破口が開かれようとしている。たとえば、今治造船が世界有数の企業であつても、そして独立の気風あふれる今治の企業であつても、一社だけの要請では、中々に難しいことだ。

また、〇九年からは国際海事展「パリシップ」を市内で二年に一回開催し、一三年には世界中から約五万二〇〇〇人の来場者を記録。まちに賑わい（にぎわい）がもたらされた。

造船会社が一致団結し、今治市とともに取り組む「今治地域造船技術センター」も、状況に明るい変化を生んだ。この一〇年間で一二〇〇人以上が卒業したが、即

戦力の技術は働く意欲につながるのだから、就職後の途中退職者は、確実に減っている。

七〇年代の造船不況をはじめ、これまでの道のりは決して順風満帆ではない。近年は中国や韓国の



「今治造船」執行役員の都築恵氏によれば、かつてと比べて造船業の就業環境は飛躍的に改良され、最近では女性の姿も見られるとか。





「今治造船」では、次世代を支える子どもたちの見学も積極的に受け入れている。「来島海峡大橋」からは、その広大な敷地が一望できる。



ライバル企業の強い圧力に晒^{さら}されているものの、今治にはほかには無いネットワークの強みがあると、都築氏はいう。

「造船所だけでなく多様な船用機器メーカーが数多くあることで、いわばジャスト・イン・タイムで、必要なときに必要なものがそろおう。世界を見回しても、今治のような海事産業の共存共栄は見られない」

ですね」

その未来に期待がかかるのは、合併後、これまで支店を設けていなかった金融機関が進出してきたことでもわかる。そして、損害保険会社、商社、海事協会、税関、海員学校と、海事関連事業の集結——海事クラスターは、これからも地元で活力をもたらしそうだ。

旅人が行く しまなみ海道が 未来にもたらしめるもの

タオル、造船という地場産業に加えて、観光振興においても、今治は大きな宝を持っている。一九九九年開通の「瀬戸内しまなみ海道」の存在だ。本州と四国の間には三つのルートがあるが、七〇キロに及ぶこの「瀬戸内しまなみ海道」の橋だけは、生活道として島の人々が利用できるように自転車道兼歩道が設けられた。その結果、二年前の調査では推計年間一七万五〇〇〇人のサイクリストが、国内外から訪れるようになったのだ。

来る十月二十六日には、今年で



「しまなみサイクルオアシス」のシステムが評判を呼び、最近では他県からもヒアリングに訪れる人が多いという、NPO法人「シクロツーリズムしまなみ」の代表理事の山本優子氏。

開通一五周年を迎えた「瀬戸内しまなみ海道」において瀬戸内しまなみ海道・国際サイクリング大会実行委員会主催の国際大会「サイクリングしまなみ」(注2)が開催される。今治市をスタートし、広島県尾道市を目指すコースをはじめ様々なコースに、参加者八〇〇〇人が見込まれる。

(注2) 愛媛県・広島県主催の「瀬戸内しまなみ博覧会「瀬戸内しまのわ2014」の一環として開催される。

「瀬戸内しまなみ海道」を世界のサイクリストも熱い視線を注ぐまでに、時間をかけて培ってきたひとり、NPO法人「シクロツーリズムしまなみ」の代表理事の山本優子氏だ。

「当初、地元の人々は橋にあまり価値を見だしていませんでした。救急医療に関する安心感や生まれたいという思いが、料金が安い、船便が減るなどマイナスの印象もあったと思います。観光客も〇六年頃までは、一部のサイクリストが来る程度でした」

もともと、一帯でグリーンツーリズム活動などはさかに行われていたが、地域独特のものは何か？と考えた結果見いだしたのが自転車。実際に旅行商品として成り立ちうるのかという視点で山本氏はマーケティングを重ねた。

「サイクリストは、そもそもバスとか車を選択する方とは違う志向性を持っている場合が圧倒的に多

今治駅前の「ゲストハウス シクロの家」は賛同する仲間がボランティアで建築に携わった。



いんです。ちょっと脇道にそれて、地元の皆さんと会話もしてみたいといった、人との交流意欲が高い。農作業の手をとめて話しかけてくれた地元のお父さんの笑顔が、一番心に残ったというような、暮らしの中に入っていくような旅行スタイルなんです。そういう方たちをお迎えするのが大切だなと気づき始めたのが、取り組みの中では大きかったですね」

一方島の住民も、外から元気を得る必要を感じているとはいえず、それとて許容量は限られている。大きなホテルを必要とするような観光ビジネスは、成り立ちにくい。両者の思いは同じところにあった。

「サイクリストが農業、漁業中心の暮らしに分け入らせてもらう。そんな旅行スタイルを定着させる必要があると思います、まずはサイクリストが島の散策を楽しめる独自のマップを制作したんです」



自転車のみならず徒歩でも散策を楽しめるのが「来島海峡大橋」をはじめとする「瀬戸内しまなみ海道」の魅力だ。

さらに生まれたのが、一般家庭の軒先を借りる形で一〇年からスタートした「しまなみサイクルオアシス」という仕組みだ。まちなかとは異なり、自転車店どころかコンビニエンスストアすらない島もある中、民家でもトイレが利用できる、空気入れも設置してあるというサイクリストへのサポート体制は徐々に浸透し、現在七〇軒以上に。お世話になった「しまなみのお母さん」に会うために再訪する、というケースも増えたという。

愛媛県全体にも広がりつつあるしまなみサイクルオアシスの総合拠点として、一四年七月にはJR今治駅前にカフェ兼宿泊施設の「ゲストハウス シクロの家」がオープン。ツーリストたちにとって、貴重な情報交換の場にもなっている。



る。

「見れば忘れられない雄大な瀬戸内しまなみ海道ですから、もう一回来たいと思ってもらえる自信があります。ただ、二回目、三回目のファンをつないでいくのは住民との出会い。四国遍路の『お接待』の文化もあるでしょう、今治の人は外から来る人を出迎えたいという気持ちが高く高いんですね」

今治市の取り組みのひとつ、「ラントウレーベン」という移住体験施設もまた、地元住民とのふれあいが自然と生まれ、「積極的に両者がかわり合いを持って、地域の盆踊りなどにもどんどん入り込んでいます」との菅市長の話を思い出した。県内外から応募者は多く、定住につながっているケースも少なくないそうだ。

独立性と協調の共存に加え、新しいものを取り入れて前に進む「進取の気質」が今治にはあるという。そのしなやかで豊かな心を羨ましく思いながら「瀬戸内しまなみ海道」の端、来島海峡大橋のたもとに立てば、青い海と空、島々の緑が織り成す美しい絵。まっすぐに延びる海道から未来にどんな新しい風が吹き込み、今治の地に根づいていくのだろうか。

